

じこてん

明治大学自己点検・評価 ニュースレター

じこてんちゃん“法学部の自己点検・評価に学ぶ”の巻

目次:

じこてんちゃんの
フィールドワーク 1

予算要求の自己
点検・評価 3

IRで「明大ファ
ン」を増やそう
ー「IR」と「情報
の公表」 4

じこてんちゃん
活動記 6

①大学評価コン
ソーシアム

②大学基準協会
シンポジウム

③マレーシア資
格機構(MQA)と
の合同研修 7

じこてんニュース
編集後記 8

今号から、じこてんちゃんは、大学会館8階を飛び出し、自己点検・評価に奮闘するみなさんのところに伺って、自己点検・評価のフィールドワークをすることにしました。今回は法学部に伺って石前先生、高橋さんにお話を聞きました。

一 主観的評価からの脱却から始める

じこんにちは。石前先生には、自己点検・評価全学委員会でもいつもお会いしていますね。先生と自己点検・評価の出会いを教えてください。

石)法学部の自己点検・評価報告書の作成に係わったのは2007年から2009年で、2007年の認証評価にも係りました。最初に委員になって報告書を読んで感じたのは、①評価するためのデータサンプルが少ないという点、②評価が主観的であるという2点です。“教員の意識が低い”なんて評価があるのですが、低いのは誰だ？なんて思っていました(笑)。

じ)データに従って評価するのって難しいですか？

石)しかし、自己点検・評価は“客観的なデータに基づき実施すること”が原点です。この方針を学部の自己点検・評価担当者と共有できたことで、今回のような客観的な点検ができるようになっていったのだと思います。

石)法学部の自己点検・評価委員は、他大学の教員を経験してきたメンバーが多く、大学基準協会評価委員の経験者もいたことで、他大学と比較する視点もあって客観性ある点検・評価ができたともいえます。

じこてんちゃんのつぶやき:

自己点検・評価は「客観的なデータに基づき実施すること」が必要であるということ、執筆のリーダーがしっかり把握していたので、適切な内容の報告書が作成されたのかな？



【お話を伺った法学部石前先生(右)と法学部高橋さん(左)】

一生かされる自己点検・評価は組織にあり！

じ)法学部の立派な報告書には、改善提案もたくさん書いてあるけど、改善に結びついているのでしょうか？

石)法学部の場合、自己点検・評価委員が他の複数の委員会(例えば、学部執行部やカリキュラム委員会等)と兼務しているので、正確な現状をつかみやすく、的確な評価ができたと思います。よく中身が判っている担当者が評価し、改善計画を立てることは、実用的な点検・評価には必要ですね。

じ)先生はいろいろな委員会があつて忙しいですねえ。

高)自己点検・評価の結果は、各委員がまたそれぞれの委員会に持ち帰って活用します。特に自己点検・評価は教育改革と密接なので、カリキュラム委員と兼務している先生も多く、学部執行部からも必ず委員が入って、学部の方針との整合を確認しています。

石)委員同士の横の連携は少ないですが、各委員は、じこてんちゃんの作成している「自己点検・評価報告書『作成の手引き』」をきちんと読んで対応しているので、的外れな記述はないですね。

じこてんちゃんの フィールドワーク

じこてん第4号

一 実績の確認には、広い視野をもった事務局が必要 一

じ) 去年の報告書をベースに作成するケースが多いけど、法学部の報告書には新しく取り組んだことが漏れなく実績欄に記入されていますね。新規の活動を漏れなく実績として記述するのは大きな組織では難しいと思うけど、何か工夫していますか？

高) 報告書作成の手順は、まず事務局でデータ部分と昨年からの変更点や新規事業について補ったものを作成し担当教員に渡します。新規事業については、私(高橋さん)が担当しているものが多く、また担当以外の活動も事務室内で情報共有しているので、ほぼ漏れなく執筆担当者に伝わっていると思います。特段の工夫はしていませんが、そういう立場が役立っています。

じ) 全部、高橋さんの頭に入っているんですね。

高) いえいえ。委員が分担して執筆した原稿は再度取りまとめ、自己点検・評価委員会の委員長が全体をチェックし、さらに学部執行部が確認のうえ、教授会に報告されます。多数の人の目に触れるので、全体としてまとまっていくものと思います。

じこてんちゃんのつぶやき:

学部の現状を正確に把握している先生と職員によって記述しているので、正確な実績を反映し、客観性を保った報告書ができていますね。

執筆担当教員が他大学での勤務を経験していて、明治大学と前任校とを比較する目線を持っているのもポイントかもしれないわ。

これから気をつけていきたいこと。

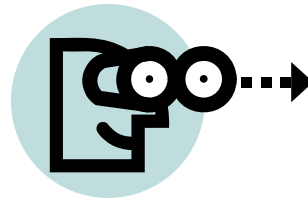
その1：外部に公表されることを意識したい

石) PDCAサイクルについては、2007年の認証評価の作業に係わったことで意識するようになりましたが、本学の報告書を読んで感じることは、「内向き」な評価に傾きがちななあということ。公開されていることをもって意識して作成すると、また違う評価になると思います。

じ) 理事長にもの申す、みたいな改善計画もみたことがありますね。

石) 点検・評価の役割は、ただ要求することではなく、しっかりした計画を作成することです。それが年度計画や予算に反映していくことに繋がります。

【自己点検・評価報告書は外部に公表しているのので、作成するときはそのことを意識するのも必要です。】



その2：改善計画と年度計画や予算との連動

じ) 改善計画と年度計画や予算への反映状況はどのような感じでしょうか。

石) 法学部の場合ですが、年度計画策定は執行部が、自己点検・評価報告書は自己点検・評価委員会が作成しています。自己点検委員会に執行部のメンバーは入っていますが、別メンバーで作成するため、すべての改善策がそのまま年度計画に反映されるわけではないのが正直なところですね。

ただし、自己点検の結果が、カリキュラム改革や教員任用のあり方等の改善に繋がっていているのは事実です。

高) 今後は、自己点検委員会と学部執行部による計画策定の検討会等を行うと計画の質や密度もあがるかも知れません。

じ) 自己点検の改善計画には優先順位がないけど、執行部が担当する年度計画や予算では優先順位や計画の取捨選択も必要になりますね。システムチックな制度になっていなくても、改善計画の一部が、そうした計画の端緒になっていれば嬉しいです。

その3：時間をかけるのは、悪いことではない

じ) 明治のじこてんは、春に始まってから12月に全学委員会で報告書を完成させて、理事長に提出。理事長のもとで評価委員会を経て公表と、時間がかかるんです。

石) 時間をかけることは悪いことではないと思います。しっかり実績を見極め、学部内の意見を集約しつつ改善計画を立案し、承認手続きを経ることを考えると前期いっぱいにはかかりますね。

じこてん第4号

大学基準の変更で、 やりにくかったところは・・・

じ)今回、大学基準協会の評価基準が大幅に変わりました。例年になくご苦労されたことかと。

石・高)自己点検・評価事務局(教学企画部)が、新旧対応表を作成したり、旧基準の報告書を新基準バージョンに複製してから学部配付してくれる等、よく対応してくれたと思います。作成時期の6月は父母会出張と重なりますが、春先の忙しいときよりはよかったです。

石)評価項目で書きづらかったところは、「成果」関係でした。学習効果の測定については学部レベルでの検証方法が分からないことです。また、一律的な定量評価、例えば、カリキュラムを改訂して単位取得率が上がったという事実を、教育効果が高まったとは評価しにくい等、評価方法が未成熟です。これらは今後の課題でしょうか。

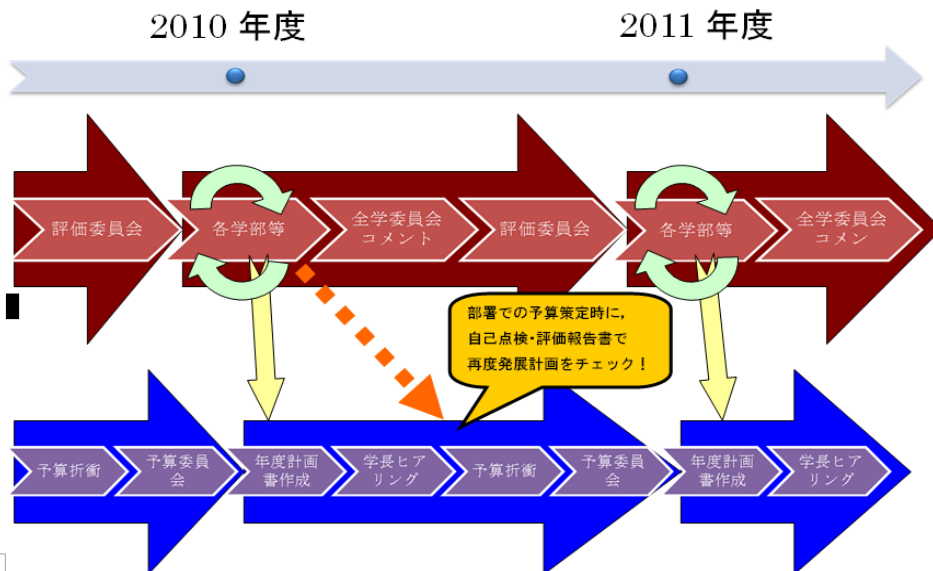
高)例えば認証評価のときに教員の年齢構成を指摘されましたが、これを設置基準に合わせた構成にすることで、教育力が上がるのか疑問です。このように、アクションプランの達成＝「よい大学、よい教育」と一概に言えないことがあるのではないのでしょうか。

石)中教審の答申や大学基準協会のコメントを読むと、「法律を遵守し、きちんとした点検・評価ができない(その手当ても出来ない)様な大学はつぶれても仕方がない」という意図が見えるような気がしますね。大学も社会的存在としての責務をしっかりと果たす、ということも自己点検・評価の意味合いに含まれると思います。

じこてんちゃんからお礼：
石前先生、高橋さん、お忙しいところ貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました！
これからも現場の皆さんにいろいろお話を伺っていきたいと思います。よろしくお祈りします☆
(取材 2010年11月5日 山本・住吉)

自己点検、活用していますか？

～2011年度予算要求の“自己点検”～



夏が終わり秋が深まると次年度予算策定の季節です。去る9月30日に2011年度の教育・研究に関する年度計画書が学長より、理事長へ提出されました。この計画に基づき、理事会では2011年度の事業計画の策定が始まり、皆様はその資料としての単年度計画に基づいた2011年度の予算要求資料を作成されたことと思います。

ここで、自己点検と計画、予算との関係についておさらいしてみましょう。上の図は何度か「じこてん」にも登場しましたね。自己点検でチェックしたことを(C)→改善計画(A)→次期計

画(P)へとつなげていくことが、改善へのグッドスパイラルのために必要だということは、本紙でも何度か触れてきました。

年度計画策定の段階で昨年度の自己点検・評価報告書の「改善項目(発展計画)」はご確認されているかと思いますが、ここで改めて再チェック。次年度予算策定時に、自己点検の際にあげた改善項目は参考にしましたか？また、アクションプランで予算が必要とした案件については、もれなく予算要求資料へ掲載しましたか？このように自己点検・評価報告書は予算策定の際のチェックリストにもなるのです。

「じこてん」の 学べる大学ニュース じこてん第4号

アイアールで“明大ファン”を増やそう！ —「IR」と「情報の公表」—

「じこてん」にイケガミさん登場？このコーナーでは、最近話題の大学マネジメント用語と日常業務との関係を“わかりやすく”解説します。

今回は、大学教職員必読3誌（『カレッジマネジメント』、『大学時報』、『IDE』）で特集が生まれ、今、話題沸騰中のIR、情報の公表がテーマです。2009年10月に開催された大学基準協会の新しい認証評価システムの説明会でも、客観的根拠に基づく評価を行うためにIR機能を持つ部局の設置が求められました。じこてんちゃんも興味深々です。

さて、IR、アイアール（Institutional Research）って、何者なのでしょう。むずかしい定義や機能のお話しは次の機会としまして、今日は、自己点検・評価や日常業務との関わりから、皆さんと一緒にアイアールのイメージを膨らませてみたいと思います。

Step 1 IR（組織アナリシス）の姿

IR（組織アナリシス）の機能は多様ですが、代表的な機能は、正確で継続的なデータを大学として一元化して収集（公式データとして収集）し、そのデータを分析した上で、学内外の要望に応じて公表することです。

業務的には、学長や部長等の意思決定者からの問いかけに対して、各種データを関連づけて政策提言（レポート）すること、と書いていいでしょう。

* * *

ある大学の学長は悩んでいます。限りある人的資源、予算で海外展開を図らなければいけません。「本学の海外展開はどうするべきか」。IRアナリスト（←米国の大学には設置されていることが多い）は、自大学の教員の学位分野の偏り方や優位性、国別外国人留学生数、奨学金助成実績等の学内データ、また競合大学データなどを関連づけて、海外展開の戦略オプション（政策の選択肢）をレポートする…という物語は、IR業務の1つの姿です。



【大学の現状はどうなっているのかな？
調べてみよう！】

Step 2 大学の課題や問題点を どこで感じますか？【実習編】

実は、皆さんも“アイアール”しているんです！

ホームページの委員会で使いにくい部分を改善する、入試広報の委員会で他大学のよい点をマネする等、“経営環境分析を基にした政策提案”をしていると思います。大学では、あらゆる教職員がIRアナリストであるかのように“アイアールしてる”のです。

ただし、それだけでは少し弱い部分もあるかも知れません。それは、数値データ上に現れてくる大学の課題や問題点です。皆さんはどの程度把握していますか。

突然ですが、ここで実習！手元にあるデータから自分の大学が抱える課題や問題点を、何点か示してみてください！

ある人は、センター入試の歩留まりが気になるかも知れませんが、ある人は大学院の定員充足率が気になるかも知れません。今話題の、修業年限内卒業率はどうか。留学しても4年間で卒業できる修学支援の充実度は多くの大学の課題のようです。中退率を減少させて志願者を増加させた大学も気になりますね。私たちの大学ではどうでしょうか。

戦略スタッフ、企画提案型業務、戦略的プロフェッショナル業務等、人事の教科書は様々な大学教職員の姿を描いていますが、このような高度な機能を発揮する前提として、IR＝自大学の姿を正確に知ること、その姿を点検する分析能力を高めることが重要になっています。

本稿におけるIRに関する知見は、九州大学高等教育開発推進センター小湊卓夫准教授によるIR研究シンポジウム（2009年10月8日）、大学評価担当者集会（2010年8月26日～27日）等における講演、意見交換をもとにしています。丁寧にご指導くださいましたことを改めて御礼申し上げます。

じこてん第4号

Step 3

IRの武器「解説付き公式データブック」

先ほどの実習で、みなさんは何を手に取りましたか？ PCの中にあるエクセルファイルを覗きましたか。会議資料のファイルでしょうか。あるいは『概況資料集』、私大連データベース…。

IR活動の課題に、データの形式が不統一であることや、データが個人PCや部署フォルダ等に散在していること、またデータの定義が不統一であること等が挙げられます。

外国人留学生数に夏季短期講習の参加者は入れるの？ 助手はフルタイム教員に数えてイイのかな、教室規模別って大中小とゼミ室の4段階かな、大学ローカルルールと文科省ルールの使い分けは共有できる？

データの意味を正確に伝えるには、図表や数値を掲載するだけでなく、その数値の説明、その数値の背景や理由を示すことが必要です。大学によっては、解説付きの公式データブックの作成(九州大学等)や、他大学比較を付けてデータを公表(早稲田大学等)する等、わかりやすく、かつ正確に伝える工夫しています。

Step 4

学生の皆さんや、

高校生、マスコミの目線で【実践編】

IRや情報の公表が話題になったきっかけは、学校教育法施行規則等の一部改正(2011年4月1日施行)に伴うもので、公布された6月、日経から読売、朝日、毎日等主要各紙で話題になりましたね(見逃した方は、図書館の外部データベースで探してみましょう)。経常費補助金の申請についても情報の公表が条件となったことは企画課から担当者に通知があったことかと思えます。

IRには、情報を正確に管理し、わかりやすく公表することに加え、読み手の意識に訴える(良い意味での情報操作)という役割もあります。高校生がせっかくHPを見てくれたのに、去年までのデータしかなかったり、国家試験合格者数が掲載されていても、良いのか悪いのか分からなかったり、その分からないことの問い合わせ先が分からなかったりしたら、明大のファンになってくれませんかよね！ 一方で、カリキュラムポリシーと一緒にGPプログラム等で積極的に学んでいる大学生の姿が表現されていたら明大に好印象をもつかも知れませんし、施設紹介のページも、単に紹介だけでなく、キャンパスツアーの申し込みをリンクしておいたら申し込んでくれるかも…

法令という無機質なことから話題になったIR、情報の公表ですが、ちょっと視点を変えて、“明大ファンを増やすこと”と考えたら、IRも気軽に取り組みそうですね。

Step 5

ゴール！を目指す姿は美しい

－ IRはマネジメントを支援する

少しハードルを上げたお話をします。

マネージャー層の皆さん、マネジメントとは、何をすることででしょうか？ ごくごく単純化すると、①ゴール・成果を示すこと、②ゴール達成のための方法・手段を考えること、③その方法を実行するために適切な人的資源や予算を用意することです。

一番難しいのは②の手段の選択。例えば「学生の多様性を確保するため地方出身者を増やす」というゴールを与えられた時、限られた経営資源の中でどのような提案をすることが適切でしょうか。貸費型奨学金を減らして給付型奨学金を増やすことでしょうか、予約型奨学金制度を創設することでしょうか、あるいは入試広報費用を工夫することでしょうか。

どの戦略をチョイスするのか、厳しい大学間競争の中、1つ1つの意思決定を感覚だけで判断するのは、心もとないですね。自大学の姿、競合大学間でのポジション、市場の動向等を客観的に見極めるため、データは武器の1つになります。そこで、データを分析する能力も重要になってきます。

大学として誰もが共通して利用できる公式なデータベースや資料集を整備すること、データや社会事象を分析できるIRスキルの高い人材を育成すること、今、これらが大学経営に求められています。

Step 6

IRと大学評価と内部質保証

最後に、マネジメント用語を整理しておきましょう。

大学評価には、データ収集・分析・公表等のIRの基本的機能の多くが含まれているため、大学評価に真摯に取り組むことはIRや情報の公表を機能させる、強化させることにつながります。

しかし、IRを強化することは、直接的に内部質保証が推進される(教育研究の質が向上する)ことにはつながりません。

なぜなら、一般的に大学評価やIRの実施主体と、教育等の改善を担う実施主体とは異なっているためです。この2つを「=」にするには、教育等の改善を担う実施主体のマネージャーもIRを理解し、IRが発するメッセージを読み取る能力と、そこから改善計画を立案する能力が必要です。

私たち大学人は、人材育成、知性の創造という、営利団体とは異なる公的な使命を果たすため、公共団体のマネージャーとして独自のマネジメントスキルを修得することが求められますが、その基盤となるスキルの1つが、“IRの理解と、IRを使いこなすスキル”といえましょう。

じこてんちゃんの活動記 じこてん第4号

その1:大学評価コンソーシアム 「大学評価担当者集会」(九州大学)に参加

2010年8月26日(木)から2日間、大学評価コンソーシアム主催の研修セミナーが九州大学箱崎キャンパスで開催され、明治大学は教学企画部から山本が参加しました。参加者は、理事、副学長から課長補佐級まで幅広く、教員・職員比は2:3程度。国公立大学等84機関から170名が参加しています。

研修は参加型ワークショップ中心に構成され、初日は「IR機能の大学における具体化ー大学評価を軸に」に参加。ファシリテータとしてニューヨーク州立大学IRアナリストの本田氏を迎え、4名1チームでIRオフィス業務のうちレポート業務を体験しました。事前課題として、学長・部局長に対する①「留学生の受入れ増加のための国際交流・教育状況レポート」、②「教育の質保証の観点から教育プログラムと学生状況レポート」の2点が課され、当日は各自のレポートを講評し合いながら各チームで新たなレポートを仕上げ、経営層が意思決定するにあたって必要な評価情報の分析手法や、戦略計画の策定の意義、意思決定における大学評価・IRの役割等を学習しました。

2日目は「計画と評価の連携ー仕組みとその工夫」に参加。前日同様、4名1チームのワークショップ形式で、まず各大学の事例報告を行いました。山本からは、明治大学独自の改善システムである「アクションプラン制度」について、制度構築の理論的背景としたロジックモデルと大学評価の関係性、そ

の実践結果について報告しました。各大学から様々な工夫が報告された後、各チーム単位でKJ法で連携促進要因、連携阻害要因について討議を重ね、PDCAサイクルを回すための工夫やFDの活用等、いくつかの提言をまとめました。

各ワークショップ終了後の全体会では、科目の達成目標を測定するために必要な情報のあり方(ラーニングアウトカムアセスメントのあり方)や、カリキュラムポリシーをチェックし、より体系的な教育課程とする方法の具体化(カリキュラムチェックリストの作成)、評価業務が教職員の力量形成や教育の質向上に与える効用(大学評価のFDとしての活用)、明確な目標設定に基づくる実用的な評価手法の実践等が課題として提案されました。

大学マネジメントの質、また教育・研究の質向上は大学間共通の課題であることから、本学もコンソーシアム活動等を通じて得た知見を活かし、大学マネジメントと教育研究の改善に反映させたいと思います。



会場となった九州大学旧工学部本館

その2:大学基準協会総会、シンポジウムに参加

2010年10月15日(金)に開催された大学基準協会総会・シンポジウムに明治大学から山本と松永が参加しました。総会では、昨年度大学基準協会の事業報告と収支決算報告、及び当年度の事業計画と収支予算の説明に続いて、前慶應義塾長安西祐一郎氏より「日本の高等教育政策について」と題する講演がありました。講演では「教育情報の公表」の意味すること、重要性に触れた後、教育の質向上について国際的な数値データ

を比較させながら、イノベーションをキーワードとした教育について語られました。シンポジウムでは「大学基準協会に期待すること」をテーマに、会長として納谷学長が登壇。評価結果の活用方法についてフロアから質問が及ぶと、本学の「改善アクションプラン」に触れ、大学全体として改善・改革を、徹頭徹尾進める覚悟を持つことの重要性を熱く語り、会場では、全国から集まった学長、評価担当理事などの役職者が熱心にメモを取る姿が見られました。

その3 明治大学とマレーシア資格機構(MQA)との 合同研修を行いました

2010年6月24日(木)、マレーシアの高等教育質保証機関であるマレーシア資格機構(Malaysian Qualifications Agency:MQA)の研修生5名を受入れ、大学評価に関する研修を実施しました。明治大学からは、納谷廣美学長はじめ、教学企画部職員が出席しました。

今回の研修は、日本とマレーシア間の「経済連携研修」(EPP)の一環として、独立行政法人国際協力機構(JICA)を通じて財団法人大学基準協会が受け入れた研修生に対するもので、同協会からの協力要請を受けて実施したものです。

研修は、御子柴博教学企画部長の歓迎のあいさつに始まり、山本幸一教学企画部員から、年度計画書と連動した自己点検・評価の実施プロセスや、認証評価結果を活用した改善システム「改善アクションプラン」の実施等、本学における質保証システムの概要について説明を行い、その後、活発な質疑応答が行なわれました。

続くランチミーティングでは、研修生から「日本での研修成果を活かしてマレーシアの高等教育の発展に努めたい」との抱負を受けて、納谷学長から「自己点検・評価に真剣に取り組んでこそ、高等教育の質向上が図られる。国の文化や大学の特色に応じた評価のあり方を構築するため、今後とも両国で協力したい」と、質保証の取り組みを国際的に発展させることを呼びかけました。

その後のキャンパス見学では、本学アカデミーコモン内のマレーシア工科大学日本サテライトオフィスも訪問し、同オフィスマネージャーのズー博士と懇談しました。

その後、研究会場に戻ってからも、予定時間を越えて質疑応答が続き、6時間を越える研修を終えました。

マレーシアは多民族国家であるため、高等教育機関と



【研修風景】

質疑応答は、両国の制度の違いを超えた有意義な内容でした。



【UTMサテライトオフィス訪問】

アカデミーコモン内UTMサテライトオフィスを訪問しました。

しては大学だけではない多様な教育機関が存在しており、それら一つ一つの教育プログラムをMQAが審査します。また、評価基準を満たすことで大学運営費が国から支給される仕組みであるとのこと。研修生からは「明大の取組み等からは、日本の大学は質向上が図られていると感じた。」とのコメントがありました。制度や方法は異なりますが、大学の「質保証」をめぐる、抱える課題は似通ったところも多く、本学にも貴重な研修機会となりました。

専門職大学院、認証評価で適合判定

学校教育法第109条第3項の定めにより、専門職大学院もそれぞれ認証評価の受審が義務付けられています。本学では、2009年度に会計専門職大学院が審査を受け、適合認定を受けました。法科大学院及びグローバル・ビジネス研究科は2008年度に、適合認定を受けています。

ガバナンス研究科は、来年2011年度に審査を受けるために準備を進めています。



【法科大学院】



【グローバル・ビジネス研究科】



【会計専門職研究科】

じこてんにゅーす！

じこてん第4号

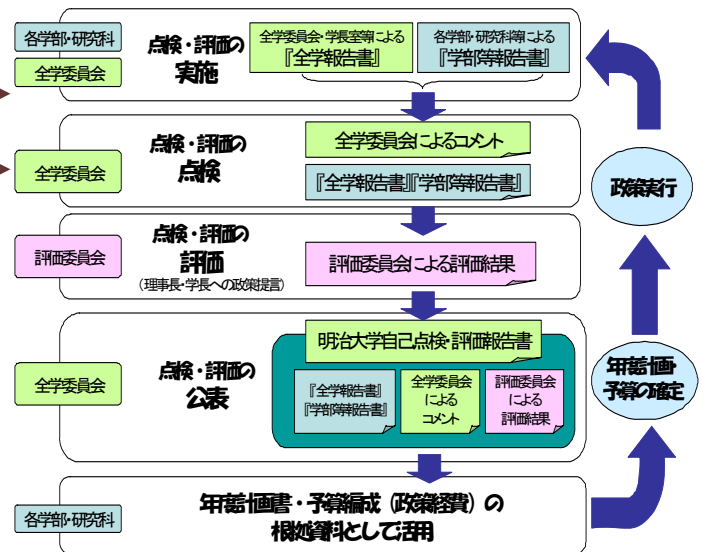
①自己点検・評価実務担当者説明会を開催しました

5月23日(金)に2009年度自己点検・評価報告書作成のための説明会を開催しました。各学部役職者、各学部等自己点検・評価委員会担当の教職員、法人事務局等から約70名にご参加頂き、大学基準の変更に伴い変更となる評価項目及びフォーマット等を中心に、ご説明させていただきました。今回初めて「評価って何？」をテーマにミニレクチャーを行いましたがいかがでしたでしょうか。また、ご要望のあった学部等へ個別説明会も開催しました。

②2010年度 第1回、第2回 自己点検・評価 全学委員会の開催

7月28日に第1回全学委員会を開催しました。各学部等から提出された第1版の自己点検・評価報告書に対し、全学委員がコメント(評価)をつけます。あわせて事務局で内容確認をし、10月8日に各学部等に修正依頼を致しました。同時に全学委員会では「全学報告書」の作成を行いました。その後各学部等で承認を受けた完成版の自己点検・評価報告書を、11月12日を締め切りに受け付け、第2回委員会(12月17日)にて審議承認します。今後は、評価委員会による評価を受けることになります。

明治大学の自己点検・評価プロセス



編集後記

今号で、じこてんちゃんは、大学会館8階に住んでいることが明らかになりました! しかも、九州に行ったり、大学基準協会に行ったり、結構、忙しい日常も明らかに…。じこてんちゃんの活動にご協力いただきました皆様に感謝致します。

さて、洗濯物が乾きにくい季節になってきました。あるセミナーで立命館大の安岡先生が洗濯物を例にFDの必要性を説かれておりましたが、男性の皆さん、奥様から洗濯物干しを頼まれることありませんか。日頃の人事研修の成果なのか、効率的に短時間で干そうとして、物干しの端っこに固めて干してしまったりします。すると、皺

を伸ばさないと後が大変、乾きが悪い等と叱責を受けます。奥様は衣類をきれいに収納すること、長持ちさせること等、“我が家の衣類管理の理念・目的”に沿った行動を旦那様に期待するのですが、理念を理解しない行動には、“助言・勧告”ならぬ、叱責を受けてしまうのです。

最終目標・成果を理解しないで単に効率や規則だけで仕事をする、本当に大切なことを実現できないことがあります。部分最適ではなく全体最適を目指し、各学部・各部署一致団結して明大の理念実現に努める姿を想像しつつ、洗濯物を干し直すのでした。



じこてん 第4号

2010年12月15日発行

明治大学 教学企画部 教学企画事務室
編集担当：外池 力(学長室専門員), 山本 幸一, 住吉 祥子, 松永 基希
東京都千代田区神田駿河台1-1 大学会館8階

電話：03(3296)4271
FAX：03(3296)4353
Email: hyouka@mics.meiji.ac.jp
URL <http://www.meiji.ac.jp/koho/about/hyouka/index.html>

